

＜モモの振興方策＞

1 モモ栽培の現状

(1) モモ栽培面積の推移

都市化の進展に伴い、栽培者の高齢化と後継者不足で管内のモモ栽培面積は減少傾向である。

表1 モモ栽培面積の推移(推定)

年 度		H27	H28	H29	H30	R元
面積 (ha)	春日井	26	25	25	24	24
	小 牧	57	55	54	53	53
	合 計	83	80	79	77	77

(2) R元年のモモ栽培者組織

農業者の組織は、春日井市の春日井園芸部が50名で、小牧市の小牧桃生産部会63名で、しのおか共撰39名である。産直グループのモモ栽培及び全量庭先販売栽培者を含めると、推定であるが栽培者は160名ぐらいである。

(3) 販売形態

小牧市篠岡地域は、名古屋市場へ昭和40年代から上末地区を中心のしのおか共撰出荷組合と高根地区の重剛出荷組合による共撰出荷と大草地区での共同出荷がおこなわれてきた。

近年、消費者への直接販売が増えており、直売施設であるファーマーズマーケットやグリーンセンターでの販売や、庭先販売が増えてきている。

2 モモ栽培のメリット

モモは、日持ち性が短い果樹であるため、従来から消費者に近い都市近郊果樹として発展してきた歴史がある。

小牧や春日井のモモ産地は、大消費地圏である名古屋市に近く、近年人口増加の著しい春日井市や桃花台団地のある小牧市を控え、消費者に近いことが、他産地にない有利性である。

3 モモ栽培の振興方策

(1) モモ栽培の推進方策

① モモサポート事業の推進

高齢化にともない、栽培管理が困難になってきている栽培者が多い。高齢栽培者を支援するための組織として、作業を請け負いできる組織体制の整備を推進する。そのため、モモ栽培サポーター事業を推進し、組織体制の整備と支援での人員の育成を図る。

② モモ栽培希望者の発掘

モモ栽培の経験のない農業者や、他産業からの新規参入者を対象にモモ栽培希望者を募集し、農地中間管理事業を活用して農地の流動化を図り、新規のモモ栽培者を育成する。

③ 新規栽培者のモモ栽培技術の習得

新規にモモ栽培をおこなう栽培者を対象に、1年間通して実地で栽培技術が取得できるモモ栽培サポーター教室を開催する。

④ ファーマーズやグリーンセンター販売者のレベル向上

春日井園芸部や小牧桃生産部会やしのおか共選出荷組合は、定期的に研修会をおこなって栽培技術のレベルアップを図っているが、それらの組織に参加していないファーマーズマーケットやグリーンセンターでの出荷者を対象に研修会を開催する。

⑤ モモ栽培に関する各種研修会の開催と新技術の習得

定期的に研修会を開催し、モモ栽培技術のレベルアップを図るとともに新技術の習得を図る。

⑥ 出荷組織の強化

出荷組織である、しのおか共選出荷組合の組織強化に対して支援する。

(2) 推進する栽培技術

① 低樹高栽培の推進

高齢化にともない、樹高が高いと栽培管理が困難になるため、図のような開帳性の低樹高栽培を推進する。

開帳性の低樹高栽培は、果実品質が均一になり、作業性が省力化できる樹形である。



図 開帳性の低樹高仕立て

② 早生種の無袋栽培の推進

袋掛けの経費と労力を削減するため、はなよめ、ちよひめ、日川白鳳までの早生品種は、無袋栽培を推進する。

③ 適期防除の推進と減農薬栽培

薬剤散布は、経費と労力が掛かる作業です。冬季の耕種的防除を実施して越冬病菌や害虫を減らすとともに、発生予察により適期防除を実施して減農薬栽培を推進する。

④ 優良品種の導入推進

「愛知白」に替わって、「なつつこ」を推進している。「なつつこ」は、「愛知白」と比較して着色が良く、袋掛けが二重袋でなくて一重袋でよく、経費と労力が削減出来る。早中生種で、品質が良く、栽培が省力できる品種を模索することも必要です。

(3) モモの作業体系と労働時間

労働時間のモデルは表2に示した様ですが、低樹高化を図りながら労働時間の削減の方向で、作業体系の見直しを図る必要がある。

表2 モモ作業体系及び労働時間のモデル(10a当たり)

作業体系	1月	2月	3月	4月	5月	6月
	整枝せん定		摘らい 人工授粉		夏季せん定	
			防除 防除		袋掛け	収穫
					防除	防除
	← 栽培管理 →					
主要作業名	1月	2月	3月	4月	5月	6月
整枝せん定						6
摘らい・人工授粉			14	8		
摘果(予備・仕上げ)				24	18	
袋掛け					18	
収穫出荷						38
防除			2	4	6	6
施肥						
その他栽培管理	1	8	1	2	2	6
合計	1	8	17	38	44	56

作業体系	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
	← 収穫 →			秋季せん定		整枝せん定	
	防除	防除	防除	防除		防除	
				施肥	施肥		
	← 栽培管理 →						
主要作業名	7月	8月	9月	10月	11月	12月	小計
整枝せん定			10		12	26	54
摘らい・人工授粉							22
摘果(予備・仕上げ)							42
袋かけ							18
収穫出荷	42	10					90
防除	2	2	4	2		2	30
施肥			2		4		6
その他管理	6	2	1	4	1	1	35
合計	50	14	17	6	17	29	297

* 愛知県が作成した、経営モデルを現状に合わせて修正した数値です。

(3) 植付け後の収益の推移

6年目までの収益の推移は、白鳳をモデルにすると表3の様になります。ある程

度収益が上がるのは、5年目からとなります。

表3 10a当たり年度別収穫量と所得額(10a当たり)の推移(モデル)(白鳳)

	植付年	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目以降
収量(kg)	0	500	1,200	1,500	2,000	2,300
収益額(千円)	0	251	564	732	983	1,150

- * 収量は、生育状況と秀品率の良い場合の推定数値です。
- * 収益額は、経営モデルを参考に修正した数値です。
- * モデルは、白鳳です。

(4) 新規開園経費について

自家労力で新規開園すると、表4が必要経費の例です。開園時に必要な機械を借りると経費はもう少し掛かります。また、新規参入者で機械を整備すると、その分経費が多くなります。

表4 開園経費(例)

品目	必要経費(円)
苗木	32,000
堆肥	3,000
稲わら	10,800
炭酸苦土石灰	4,950
BM溶リン	8,950
ほ場整備経費	100,000
諸経費	200,000
合計	359,700

- * 10a当たりの植栽本数は、20本植えとした。
- * ほ場整備は、自分でおこなう。

(5) モモ経営の収益性

目標とする所得は、表3のように白鳳で10a当たり60万円ぐらいとしました。条件が良ければ、達成可能な数値です。愛知県の経営モデルでも、所得が60万円ぐらいとなっています。

表5 収支モデル:成園での10a当たり(白鳳)

	合計(円)
収量(kg)	2,300
単価(円/kg)	500
粗収益	1,150,000
(収入合計)	(1,150,000)
肥料費	30,000
農業薬剤費	95,000
小農具・資材費	60,000
動力光熱費	28,000
原価償却費	150,000

修繕費	32,000
販売費	158,000
その他	20,000
(経営費合計)	(573,000)
農業所得	577,000
農業所得率	50%

* 想定条件は、小牧市篠岡地域対象で、ファーマーズやグリーンセンターでの個人販売形態です。

* 愛知県が作成した、経営モデルを現状に合わせて修正した数値です。

3 販売方法

しのおか共撰出荷組合による共撰出荷は維持するとともに、ファーマーズマーケットやグリーンセンターでの直売施設による個人販売を推進する。

また、大規模経営体を育成するとともに、消費者との交流型販売形態の構築を図る。

4 加工

一部の栽培者で、ジェラード等の加工がおこなわれている。また、お菓子製造メーカーによる熟期の進んだ果実を利用してのお菓子作りがおこなわれている。